

乳幼児教育相談（けやきルーム）における保護者支援

～補聴器や人工内耳の装用や聴力測定の場合での配慮～

林 徳子・山縣 浅日・杉山 砂寿・佐藤 文昭・山中 健二

聴覚に障害のある乳幼児への早期補聴を進めていく時、保護者が子どものきこえの様子をつかみにくいことや補聴器や人工内耳の装用がうまく進まないこと等により、保護者が不安や焦りを感じることが多い。本稿では、補聴器や人工内耳の装用や聴力測定の場合で実際に見られた保護者と子どもの様子、その時の担当者の関わりや配慮する点等についてまとめた。保護者の思いに寄り添いつつ、子どもの成長や発達の様子を丁寧に見ていきながら、個々の親子の状況に応じた支援が必要であると考えた。

キー・ワード：乳幼児教育相談 保護者支援 補聴器 人工内耳

1 はじめに

聴覚に障害のある乳幼児にとって、最も身近な存在である保護者との心地良い関わりは、コミュニケーションや言葉を育む上で土台となるものである。

聴覚に障害のある乳幼児のきこえの反応の様子は個人差が大きく、子どものきこえの様子をつかみにくかったり、補聴器や人工内耳をすぐに外してしまい常时装用出来るまでに時間がかかったりして、保護者が不安や焦りを感じることも多い。

本校乳幼児教育相談（けやきルーム、以下同様）では、親子の楽しい関わりの中で保護者が補聴器や人工内耳の装用に前向きに取り組めるように、個々の親子に応じた支援の仕方について担当者間で情報を共有しながら日々話し合いを重ねている。

聴力測定の場合でも保護者が安心して子どもに寄り添えるように配慮しながら聴力測定にあたってきている。

本稿では、補聴器や人工内耳を装用する場合や聴力測定の場合で見られた保護者や子どもの様子とその時の担当者の関わりや配慮する点をまとめる。

2 研究の目的

乳幼児期の保護者支援として、補聴器や人工内耳の装用についてのアドバイスや、聴力測定の場合での配慮を取り上げ、担当者が子どもや保護者への関わりで気を付けていることやそのねらいについてまとめる。

3 方法

（1）対象

本校乳幼児教育相談の担当教員4名

（2）方法

各担当者が子どもや保護者への関わりで気をつけていることを話し合い、考察する。

4 けやきルームにおける補聴に関する取り組み

（1）活動前に補聴器や人工内耳の点検を行う

補聴器や人工内耳から常に良い状態で音が届くようにするため、担当者は、補聴器や人工内耳の作動状況に常に気を配るようにしている。登校後すぐに各担当者が補聴器や人工内耳の点検を行っている。

補聴器や人工内耳を装用して間もない時期の保護者は、補聴器や人工内耳の扱いに戸惑うことが多い。補聴器や人工内耳の扱い方に慣れるまで、繰り返し触れる機会が必要になる。そのため、活動時の点検には、担当者が家庭での点検の様子を聞き、保護者からの相談に応じている。

補聴器や人工内耳の扱いに慣れてきたように感じられる1歳児や2歳児の保護者であっても、忙しい生活の中で忘れてしまったり、知っているつもりで実は知らなかったりすることもよくある。例えば、毎日の電池残量チェック、実際に音を聞いてのチェック、イヤモールドやチューブが劣化

していないか、チューブ内に水分がついていないか等である。グループ活動や個別指導の度に担当者が声をかけることで、意識してもらうようにしている。

（２）グループ活動や個別指導の中で補聴器や人工内耳の装用の状態や作動状況を観察する。

補聴器や人工内耳の装用を進めていく時には、子どもが安心して楽しく遊べる環境が欠かせない。

担当者は、グループ活動や個別指導で一緒に楽しく遊びながら、常に子どもの声の出し方や声をかけた時の応じ方、気づき方等を観察し把握するようにする。そうすることで、いつもと違う様子もつかみややすくなり、速やかに対応することが出来る。

（３）０歳児、１歳児、２歳児それぞれに、聴力測定及び補聴器の調整を行う補聴担当者を置く

けやきルームでは、グループ活動を担当する教員と聴力測定や補聴器の調整を行う教員を各年齢ごとに決めている。グループ担当と補聴担当が連携を図りながら子ども一人ひとりの補聴についてきめ細かく検討していく体制をとっている。それによって複数の教員の視点で補聴に関する検討が出来る。

（４）「週の記録」に書かれてきたきこえに関する内容を担当者間で報告し合う

保護者から提出される週の記録から、きこえに関する内容を担当者間で報告し合い、情報を共有している。担当者間で同じ情報が共有できていることによって、複数の担当者の目で子どもの補聴器や人工内耳の装用状態を見ることが出来る。

（５）医療機関との連携を図る

医療機関との連携を図り、子どもの様子や聴力測定の結果をやりとりしたり、補聴に関する助言を受けたりしている。保護者を介して、聴力測定結果やけやきルームでの子どものきこえの様子や活動の様子を情報共有する。耳鼻咽喉科医師から補聴に関する助言を受けることもある。

５ 支援の実際～各年齢の配慮～

（１）補聴器や人工内耳の装用について

① ０歳児

【子どもの様子】

少しずつ動きが活発になり、探索も盛んになる。次第に耳元の補聴器に手が届くようになると、補聴器を外して舐めたりかじったりしていることがよくある。

握ったものを放せるようになると、何でも投げたり落としたりするようになる。身につけている補聴器もその例外ではなく、外して投げたり落としたりする。また、保護者が使っている物や食べている物等に興味を持ち始めると、同じように補聴器を外してイヤモールドを引っ張ったりいじったりする。

また、この時期は、きこえの反応の様子が子どもによって様々である。視線や身体の動き、表情や声の出し方の変化等が捉えにくいことも多い。

【保護者の様子】

難聴の診断を受けて間もない時期である。出来るだけ早期の補聴が必要であると医療機関から説明を受けてくるケースがほとんどである。けやきルームでの支援が始まり、補聴器の装用が始まったと思ったら、子どもが補聴器を外してしまったり、つけたがらなかつたりする。以下は、実際に見られた保護者の様子である。

- ・「どうしよう」と焦ってしまい、補聴器や人工内耳を持って子どもの耳元ばかりを見てしまう。
- ・「大事だから取ってはダメ！」と強く叱ってしまったり、とっさに手を抑えたりする。
- ・すぐ外してしまう為、「補聴器がつけられない。ダメなんだ。」と落ち込む。
- ・子どもが補聴器や人工内耳を嫌だと思っているならつけなくてもいいのではないかと迷う。
- ・補聴器や人工内耳を外されると、自分のことを子どもに拒否された気持ちになって悲しい。
- ・「よく補聴器を使って聞いている。」と言われるが、自分は子どもを見ていてもよくわからない。

【担当者の関わりや配慮】

親子の楽しい関わりの中で、補聴器や人工内耳をつけていくことが基本になる。この時期は、周囲の人の楽しそうな声を聴き、楽しい関わりに伴ういろいろな音を楽しむことが大切だと伝えている。

補聴器や人工内耳の装用時間が非常に短く、家庭での装用が難しいケースもある。保護者が補聴器装用に対して不安を感じ、焦りや緊張で表情が硬くなったり、無言になったりしている場合、まず、保護者が肩の力を抜いて、安心して親子の関わりを楽しめるようになるための支援が必要である。

担当者は、グループ活動や個別指導の中で、親子に笑顔で関わり、子どもをあやし、子どもが遊ぶ遊びを何度も繰り返しながら、楽しい関わりの中で補聴器をつけるようにしていく。そしてその様子を保護者に見てもらっている。子どもが遊ぶ様子を見て、その可愛らしさに保護者も徐々に笑顔が増えてくる。けやきルームの活動中に、遊びながら20分間補聴器の装用ができた、外してしまうことなく過ごせた、けやきルームからの帰り道も途中までつけていられた等、少しずつでも装用出来るようになっていくことを保護者と一緒に喜び、家ではどうしても装用ができなかったと落ち込む保護者の思いに寄り添い励まししながら、出来そうなことは何かを一緒に考えていくようにしている。

子どもが補聴器を外すのは、動きが活発になり、耳元に手が届くようになったり、つかんで引っ張れるようになったりと、成長してきたからこそ見られる姿であること、補聴器や人工内耳の装用に限らず、遊びの中でも似たような成長の姿がみられること等、保護者が補聴器や聞こえだけでなく、子どもの成長や可愛らしさにも気持ちが向けられるように関わっている。

また、子どものきこえの様子が捉えにくい時期であるため、担当者は継続的な観察と保護者への聞き取りを積み重ねていくようにする。保護者の焦りや不安に寄り添い、「補聴器を通して

よく聞いている姿」は、子どもの表情や声、動きから徐々に分かりやすくなることを伝え、担当者が掴んだ子どものきこえの様子を伝えている。そして、捉えにくい時期ではあるが、子どもは保護者の話しかけを聞き溜めている為、根気よく関わるよう伝えている。

② 1歳児

【子どもの様子】

自分なりにやりたいことが出てきて、気ままにあちらこちらと歩き回るようになる時期である。

補聴器や人工内耳の装用に限らず、生活全般を通して自己主張が強くなっていく。何かをさせようとしてもぶつかることが増え、保護者が関わりに困る場面も増える。

子どもは、思いが通らない時や、自分のそばに来てほしい時等、保護者の表情を窺いながら繰り返し補聴器や人工内耳を外してみせたり、手渡してきたりすることがある。気分によって補聴器や人工内耳の装用を嫌がったりすることもある。

【保護者の様子】

子どもが生活や遊びの中で出来ることが増え、成長を感じ、「子どもが好きな遊びを楽しんでいる様子がとてもかわいい。」と、子育てを楽しめるようになってくる。一方で、子どもの自己主張に困ったり、振り回されたりすることも多い。以下は、保護者との話の中で実際にあったエピソードである。

- ・子どもが一人で遊んでいる時に、補聴器をつけようとしたら、子どもが嫌がって怒り出した
- ・母親が台所で食事の支度をしていると、ベビーゲートの向こう側で、補聴器を外して手渡そうとする
- ・一緒に遊んでいる時は補聴器をつけているのに、一人になると直ぐに外していじっている
- ・「おしまい」「ばいばい」が分かってきた。片づけを嫌がり、人工内耳を外して寝転がる

【担当者の関わりと配慮】

子どもなりの思いが強くなってくると、補聴器や人工内耳の装用に限らず、生活全般を通して、子どもに何かをさせようとしても子どもが思うように動いてくれず、保護者が困ったり悩んだりする場面が増えてくる。この時期の補聴器や人工内耳の装用は、日常生活全般での親子の関わりと関係が深い。

子どもが補聴器や人工内耳をつけたがらない、外してしまう等の場合、まず、補聴器や人工内耳の調整がうるさすぎる、または出力が足りずに刺激が少ない等の問題がないか、中耳炎等による不快感はないかを観察や聴力測定、保護者からの聞き取りによって確認する。実際には、補聴器や人工内耳の装用を急に嫌がったり、保護者の表情を窺いながら補聴器や人工内耳を外したり投げたりする場合は、子どもなりの気持ちの表れであることが多い。

補聴器や人工内耳を外す前に子どもは何をしていたか、どのような状況で外したのかを保護者と話し合い、子どもなりの理由を一緒に考えていくようにしている。話すうちに保護者自身が「今思えば、～をしている時だった。」「こんな風に思っていたかもしれない。こうしてあげればよかった。」等とその時の子どもの気持ちや状況に目を向けて気づくことも多い。担当者は、保護者の疑問に直ぐ答えを出さずに、「どうしてだろうね。」と保護者と一緒に子どもの様子を見て話し合いながら、保護者自身の気づきや実践の工夫に繋がっていきけるような場面作りをしていく。

また、子どもが、保護者の表情を窺いながら補聴器や人工内耳を外しても、騒がず、叱らずにそのまま受け取って、つけ直してみる。それでも外してしまう場合は、少し時間をおいて遊びながらつけてみるようにしている。

担当者は、子どもなりの気持ちが出てくる時期だからこそ、子どもが興味を持った楽しい遊びを何度も繰り返し、満足するまでつきあって遊んであげてほしいと保護者に伝えている。この時期の子どもは、例えば「積んでもらったソフトブロッ

クを倒す」遊びが好きである。子どもは、一緒に遊ぶ大人がソフトブロックと一緒に倒れたり、「バーン、したね。」と驚いた表情をしたりすると、面白がって何度も繰り返して楽しむ。ただ積んであげるだけだと直ぐに別の遊びに移ってしまう。グループ活動や個別指導の中で、保護者が子どもの気持ちの動きをよく見て、親子で関わりながら遊べるように配慮していくことが必要である。

③ 2歳児

【子どもの様子】

生活の中で身の回りのことを自分でやってみようとするが増える。初めは、思うようにできないことも多く、怒ったり泣いたりすることもあるが、周りの大人に励まされたり、一緒にやってみたりして段々上手になってくる。

「自分の補聴器」と徐々に意識し始め、「おみみつけて。」と自分からつけて欲しいと伝えてくる子どもも出てくる。

また、0歳児から補聴器の装用を進めてきた場合、補聴器や人工内耳の常时装用が進んでくる。

軽度、中等度難聴の場合、特に乳幼児期は本人が生活の中で補聴器の必要感を感じにくく、保護者も家庭の中では伝わりにくさを感じていないケースが多く、安定した装用に時間がかかることが多い。

【保護者の様子】

補聴器や人工内耳の装用の進め方に関する、相談は少なくなる。

【担当者の関わりと配慮】

子どもが補聴器や人工内耳の点検の様子に興味を持つように、家庭でも親子で一緒に補聴器や人工内耳の点検や手入れをしてみるように伝えている。子どもが補聴器や人工内耳は「自分の大切なもの」と感じるようになる。

そして、「自分のもの」「自分の事」に意識を向けられるようになると、身の回りのことを自分でやろうとするようになってくる。保護者には、先

回りせずに、自分でやり切れるように一緒に取り組んだり、見守って励ましたりするように伝えている。

特に、大切なのは「聞く時は相手の顔を見て聞く、話す時は相手の顔を見て話す」ことである。相手に気持ちを向けてやりとりする態度面の育ちとして重要なルールである。

軽度、中等度難聴の子どもについては、慣れた生活の中でなら、保護者との簡単なやりとりに応じられる場合もあり、保護者も本人も生活の中で聞こえにくさの実感が持てないことが多い。その為、安定した装用に結び付きにくい。担当者は、実感が持てないという保護者の気持ちを受け止めつつも、今後成長と共に配慮が必要になること、実感のない今のうちからの補聴が効果的なこと等、出来るだけ具体的な例を挙げながら話を進めていくことが必要である。特に聞く時は相手の顔を見て聞く、話す時は相手の顔を見て話す、というルールは、聴力に関係なく、関わりの基本であることも伝える。

(2) 聴力測定の場面について

① 0歳児

【子どもの様子】

子どもの聞こえの反応の様子は、月齢が小さい程、視線や表情の動きがごく小さかったり、聞こえの反応の様子として掴みにくかったりする。

【保護者の様子】

保護者は難聴の診断を受けて間もない時期であり、聴力測定そのものへの不安や緊張がある。測定の度に、「きこえるようになっているかな」と口にする保護者もいる。

乳幼児の聴力測定(COR)は子どもの体調や機嫌、環境などにより変動が見られることがよくある。保護者がその変動が5デシベル程度であっても、「よくなった。」と喜んだり、「悪くなってしまった」と表情がこわばったりと一喜一憂する様子が見られる。

【担当者の関わりや配慮】

聴力測定室に向かう時点で、保護者が不安そうな表情をしていることがある。けやきルームの建物から聴力測定室までの間には、渡り廊下があり、そこからは、幼稚部の中庭で元気に遊ぶ幼稚部の子ども達の様子が見える。友達や教員、保護者と元気いっぱい走り回っている様子を見て、子どもの可愛らしいエピソード等を保護者と話しながら検査室に向かうようにしている。

医療機関での聴力検査時の様子や心配なこと等も尋ね、保護者の不安が少しでも軽減するように出来る限り説明をするようにしている。

聴力測定をしている時は、音が聞こえたら動きが止まるのか、聞こえなくなったら動き出すのか、目の動きはどうか、声の出し方はどうか等、子どもの聞こえの反応と思われる様子について、具体的に説明するようにしている。

結果についても、オージオグラムによる結果の説明については、数値の説明ではなく、保護者がイメージしやすいように、より具体的な生活の場面に例えながら伝えるようにしている。担当者が自身の声の大きさをあらかじめ騒音計で調べておき、子どもに届きやすい声の大きさについて具体的に説明したり、オージオメーターで実際の音の大きさを聞き比べてもらったりしている。

② 1歳児

【子どもの様子】

自由に動き回れるようになり、自分なりにやりたいことが出てくるため、聴力測定の最中も興味がいろいろなところに向く。

【保護者の様子】

子どもが動き回ることを否定的に捉え、不安に感じてしまう。「座って。」と子どもに繰り返し伝えるが、思い通りにならずイライラしたり、困っていたりする様子も見られる。

聞こえのことよりも落ち着かない事に不安を感じる。

【担当者の関わりや配慮】

集中して取り組める時間が短い理由の一つとして、自分で自由に動き回れるようになり、いろいろなことに気持ちが向くようになったことが挙げられる。聴力測定の場合でも、生活場面と同様に、子どもが何に興味を持ったか、子どもの様子をよく見て、一緒に付き合ってみる。子どもの興味に付き合いながら誘ってみると、担当者の要望に応じたり、担当者のすることをまねてみたりすることが増えてくる。

保護者に対しては、聴力測定の結果が子どものきこえ全てを表しているわけではないことを聴力測定の度に伝えるようにしている。結果を読み取っていく上で、生活の中での実際のきこえの様子が重要な情報になることを伝えている。

保護者に対しては、聴力測定の結果が子どものきこえ全てを表しているわけではないことを聴力測定の度に伝えるようにしている。結果を読み取っていく上で、生活の中での実際のきこえの様子が重要な情報になることを伝えている。

③ 2歳児

【子どもの様子】

生活の中で、慣れた相手だとやりとりしていて通じることが増えてくる。生活の中でも自分でやりたがり、自分で出来たことを 担当者や保護者に褒められると嬉しがるようになる。聴力測定にも慣れてきて、保護者がそばで見ていると落ち着いて取り組めるようになってくる。

自分で思ったことを行動に移すまでに時間がかかることもある。せかさずにゆっくりと付き合いながら待っていると自分なりにやってみようとするようになる。

【保護者の様子】

子どもと伝え合いを楽しめることが増える。子どもの成長を喜びながらも、他の子どもと比べて焦ってしまうこともよくある。子どもへの伝え方を工夫しようとする様子も見られるようになってくる。

【担当者の関わりと配慮】

「ここ（スピーカー）からブブブブって聞こえるよ。」「聞こえたら押すよ。」「手はピッとできるかな。」「そうそう上手だね。」と子どもとやりとりしながら測定を進めていく。ゆっくりと落ち着いてや

りとりする姿を保護者に見てもらい、生活の中でもこのように一つ一つ丁寧にやり取りすることが大切であることを伝えている。

聴力測定に集中してほしいという気持ちから、子どもが保護者の方を振り返ると、前を向くようにと指をさしたり、顔をしかめて首を振ったりする保護者もいる。保護者の気持ちに寄り添いながらも、母親がそばで見ている安心感を支えにして取り組めるようになってきた子どもの成長の姿であることを伝えている。そして、子どもの気持ちを受け止め、ニコニコと笑って頷く等、子どもが安心できるように応じてほしいと伝えている。

6 まとめ

乳幼児の早期の補聴は、親子での心地良い関わりの中で補聴器や人工内耳の装用を習慣化していきけるように支援していく。乳幼児教育相談の担当者は、保護者が親子の楽しい関わりの中で補聴器や人工内耳の装用に前向きに取り組めるように、また、聴力測定の場合でも安心して子どもに寄り添えるように支援していくことが必要である。今後も保護者の思いに寄り添いつつ、子どもの成長や発達の様子を丁寧に掴み、保護者と話し合いながら、個々の親子の状況に応じた支援を考えていきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

山中健二・土手 信・佐藤文昭・杉本真美・桑原美和子(2021)乳幼児教育相談における保護者支援(3)～子どもの成長を支える親子の関わり～. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要、44、26-31.